



續一劫回身仙



續 甲子仙序



今ハ十とせありとてとてのむに
蕪村標良の二史とてとて
嵐山のあつゝの小路乃僑居とて
百鬼夜行の末話とておとんとて
いふとてありとての更耳おとんとて
あれいふとていふとて田吟流り
みよとてとてとてとてとてとてとて

仙とてう侍らるる近書林ありし
 本この河に世にひらり侍りし
 然るに三老を既く没して我獨
 存せり高し此らるる危き時の曉臺
 嶺峩の元しとて建てて治るるを
 ちりぬる書羅加の口のわが心も
 かくこれも都にたるものありたるもの
 ある日樵木町の月溪の菴に
 ありし

前ありし也余簡をとりていさや
 此流もくしと添りてあやしの樓
 この河をとかの老婆子の化し絃
 音を介しとて戯れをやらんと
 ある一眉を志すもあつらひりし
 その妖撫のうめとくを醒さ
 としとて接より改帳とて入
 端寤せんるるをきらるる二塔

くまやそ筆硯をとり
再いし兼四寄仙の海を真珠
串しみるをう侍りぬ

来半亭九董書

天明と丁未孟夏上浣

其一

曉臺

壁やぬくありけきの四月
飛蟻ある日乃晴くくありき
遠騎くちの風掃やちるん
咲くまつの梅散りけり
舟のほむ春の泊り酒貫し
波の浮網よるそんし

九董

月溪

青羅

董

臺

能きよの影はまきけはらる
まよの飯喰ふ布ヨモクまよ
能くちの屯の裏ゆく芥ヨモク及
廓をぬけぬあつよ
和り刀をかくは袖乃日
次磨の並私用のをぬ
虚網をカサ鸚の色もなりつる
味しや答は伊達の花元
臺 堇 蘿 溪 堇 臺 蘿

おもよく本周廓の仮り
秘めかく書をとく字はる
花の對してうつく構の夕鼓
普茶の崩きの眩カサ字はる
菓の情の怒すまよく飛立し
美人の死はあよの叢
あさしと墨の袂の世はら
伶ゴトの役よはるもさるぬま
臺 堇 蘿 溪 堇 臺 蘿

いしり雪柳の節々階添り

蘿

狸の顔やかり賣家

溪

さかしの人の膝もかゝる負を

臺

我の盲をい非もうげや

董

こゝろをさへ今もなほ古具足

溪

おのらのまゝも塩飽七島

蘿

弓張り五更の天ハ澄かり

董

こゝろあつてお院参の家

臺

機の片足らむをうら櫓

蘿

こゝろを多くて憎まぬ者

溪

一の瀬も二の瀬も高よ星ぬり

臺

芦うらうらて炬火をうら次

董

米五石餘りて花も神も能

溪

家くおほよ獨活をふ蕨

蘿

花の散るををうらむ
海は是を平に我力をとらふ

青蘿

うつらやうとある鼻をら

妻の鳥の啼もあゝ音 月溪

江乃楓くれそ井深くある家 九董

御門にふ入るきく秋の風 曉臺

番匠乃良をそらゆる物乃月 溪

剛飯蒸く配る辰の日 蘿

足利のあいら志のよむの 蔭 臺

わがやうを志を寺へ祈る 董

物起をひらけ仕習ふのまぢ 蘿

よる扇はるめは蜘蛛の糸ちる 溪

筆工の筆干はるやめむむ 董

野志あゝの雀賣く行く 臺

か何くくハ元へ志まむ 鬘の髪 溪

二及あゝの書あゝ殿の媒 蘿

存あけつるけりも国のみぢれ管 臺
旅のやどりも人磨忘しと 董
やえうたを尋ね土佐泊 蘿
入日のあのを雨ちのくたん由 溪
矢軍は骨奴エヒスの岩さあけを 董
泥を蹴あけの使わさ云 臺
祐天の雲を志つる昇居し 溪
をくまのくま雪の紅梅 蘿

さびしく扇のおりく句あか 臺
放下の娘みやいこさう 董
七ツの上舟く鐘やはるあや 蘿
鳥も木やも吹まら風 溪
目の節子物盗と本非人をも 董
二階の裸大笑いある 臺
追善より浄るうらな月 溪
木津をこも綿の上化 蘿

船の角大炊の局下、居て
 磬くくくくを蒼木をくく
 刺殺に猿の毛生衣形く
 深きとととをこの道の神
 荒とと次藤のくろの道橋
 興をむむむととと借くく
 臺 堇 溪 蘿 堇 臺

其三

ありてはありてもありては八月
 田中の松よ出あふる声
 簾挟し茅の宿く基をたし
 水風呂あうく皆噴いより
 弦繩く馬衣の湿りけり
 榎く落く雷のあや
 月溪 曉臺 音蘿 九堇 臺 溪

大宮司の白き衣はく之を着て
娘むすめらんとある人ひとと志こころと
音ねくの躍おどおのとよからんりん
新あらた譯わけ船ふねの錢ぜにきよしめ
待まち合あはれ秋あきの古ふる手ての立た玉たま座ざ
女めあらるしの眼鏡めがねうけつつ
灌かん頂ていを大おほ日ひ度たの執とり来きたて
糸いとのよめ菜なの香かるる白しろくく苞ほう
溪 臺 董 蘿 臺 董 蘿 臺 溪

少せう世せ炭すすくとおのの初はつ雪ゆききまんん紗さ 董
流ながるるらんらんににてて自みづか刺さしる窓まど 蘿
死しする居ゐるる其そのきまあらぶぶのの毛けのの比ひ 溪
くくハハ照てるる日ひももささくく西にしのの照てるる 臺
畑はたけおも黒くろ津つのの里さとのの川がは普ふ徳とく 蘿
古ふるのの茶ちや釜かまをを汲ひけりてり 董
雞けいのの釜かま尻しりささりりくく梁りやうとと 臺
そそううととももぬぬよよ入い梅うめのの夕ゆふ棠たう 溪

築此少女く三線習ふ小船既
 花笈の嘘の合を片つ戸
 口却平浪屋の風をかのみ
 ちりく子の色をよ此ころ
 遊ユまのハかカのまマを最上何
 鬼キと女君の秘を串小私
 力チカラのまマのまマと嬉ヒばの前
 泣ナくしシもぬヌはハの半部
 董 薙 臺 薙 薙 臺 薙 董

伊よの海のあアとカシ城シかカの道ミチ咲
 支珠をシおオるル醫イのノ夜ヤしシよ
 修シめるル油アあアやマつツのノ暮ク
 少名小坂の月ツキおオを押オす
 花ハおオくク駕カのノ産ウをウ川カのノ朗ラウ
 春ハル閑カれるルもモがガのノ埋ウ火カ
 董 薙 臺 溪 薙 董

苦哉名利人
樂矣乞兒身

乾銜^干名利のあはれなきなり

几董

世の裸力の雪や霰や

音羅

將倉乃あはれなきとらふ大吼と

曉臺

小松のす清く落るる水

月溪

うよむは市の苧麻^{カラムシ}肌をきく

蘿

親子のされく柳を奪あふ

董

こころと板間へ持る古鼓

溪

踏まの存を神もわかん

臺

藤分て我より先けのよみ人

董

抱ふ運と板をぬつて刀

蘿

玉緒の茶入^{懐袋}のく包と握

臺

雨暗りしてぬる短夜

溪

まゝ残る火串の巻り腥く

蘿

かかふよりの會津根を越

董

懐の鏡くくはるくくつと
寺廟中のあはれ蒲公英のあ
初ふとむの顔ぬる花の月
花をたれえ水もあつた
春あめ 櫻あめのあやせをい
あこちとるなる 離祭はる
國替子百里ゆする 駕の旅
雲の白さの我く驚く

溪 臺 蘿 臺 溪 蘿 臺 蘿 臺 溪 蘿 臺 溪

碁をくくて童子のぬるを深
水の節ぶらう 白く凡蘭
酒涼し石かたんと酒来
あはれ 添へ 配る木 枕
氣うつと 雲^{クラシ}の妹の霞工み
力の秋清あふ月の影を
騎もは 芦色の駒の款を踏
雲の籬のそあこむは

溪 臺 蘿 臺 溪 蘿 臺 溪 蘿 臺 溪 蘿 臺 溪

五百年鉦鼓うつれる常念佛 溪
 ありて其来女の髪よりしん 臺
 施郎を扇のそと判りて 董
 鳥啼 妻のありつよの元 蘿
 砂川の流る深し 屯一座 臺
 け次子水る 洲詠の春 溪

蕉門俳諧書目録 菊舎太兵衛藏

京三条通寺町西

七部拾遺

先の七部集に遺る七部と
小刻と

全二冊

鶴のあゆみ
松乃真

此詩に記す
初 任

熱田三子仙
其 帝

一ツは

四部録

くちかゝる評ありし句を乃書
四集と小刻と

未刻全二冊

田舎句合
蛙 合

蕉門評注
其角桑白

友壺句合
四季句合

蕉門評注
春素堂評
秋湖春評
冬芭蕉評

蕉門評注
其角桑白
蕉門評注
其角桑白
蕉門評注
其角桑白

格外弁

くちかゝる句合の活はありし
を接華して論せし書し

一冊

三草紙

白紙 未至 全三冊 蘭更撰

此書は蘇門人に書あり一巻を伊豆土芳
名に記するなり大工伝授不詳あるよし

芭蕉談

全二冊 肥後文暁著

芭蕉翁著門人小本傳記一巻を立未小松等より
ふりあがり一巻を長崎予七より得たり 書なり

冬比日注解

全二冊 浪華升六著

法家九流とあり華々しく一解なり
茶に世に傳ふと稱する教々事とのを

かげこ

首に本巻を加古今語名家の句が
あつて押入伝授するものあり 全二冊

道方便

古人明水の著乃及格集を
刪補して書し

全二冊

此書ハ蕉門傳授の秘を多く古語の白を挙ぐり一且茶白
付を乃仍法より取りて古古集を格集より取りける佳境にあり

梅翁宗因發句集

全一冊 浪華一炊菴著

世説

芭蕉翁著門人乃り抄とありん

全五冊 蘭更撰

芭蕉翁消息集

翁乃出傳傳授不詳あるもの物語とありん
并に同おとありん 全一冊 蘭更著

去来文

去来浪化傳授不詳あり文并ふとの詞と
つし一巻去来浪化とありん 全一冊

麻加

能得不詳ある古人の書傳授不詳ありん
全一冊 栗津 重厚著

一夜四哥仙 梶良 蓋村 几董 嵐山 藤原 全二冊

同續 曉臺 青蘿 几董 月溪 全二冊

舊門 六家集 梶良 蓋村 麦水 全六冊

今考う舊門と称する家多くは六子より少敷更に舊門
中興の名家と其家と撰と書六歌をあらわす并伝と係といふ

四季 袖きしり 懐中本 壹冊

四季 系車 後上巻白付白紙使と知る
古人丸白とあらわす 懐中本 一冊

蓋村七部集 其雪歌 明 鳥 一夜四哥仙 桃李 全二冊

其雪歌 明 鳥 一夜四哥仙 桃李 全二冊

號明鳥 五車及古 花鳥篇

周文集 梶良 蓋村 几董 嵐山 藤原 全二冊

玉藻集 全二冊 洛 蓋村 著

梶良集 全三冊

梶良拾遺 全二冊

百家仙 中興舊門名家百人歌ありし

八仙哥 全一冊 洛 丈左 著

梶良集 全三冊

玉藻集 全二冊

周文集 全二冊

梶良集 全三冊

梶良拾遺 全二冊

若葉集

今何名か三十八人余乃逸多像と加ふ
全一冊 玉屑著

伊丹風流

鬼貫白選七車ホリ丸水
全一冊 湖東紫英編

今風流

四季發句集 全二冊 洛其成編

此書は付法園の風潮とあるが、その四季の発句とあり、
本と梓切りにして入る、乃五句と投し、終るるは希ふ
挑志ろと
とそひの附合七ア集日後日持連ホ
ゆるりの敷きをあらわむ 軒題輯

俳題正名

此書は四季の題にほと加へ切字でにこの秘傳
とどれ全一冊 伏見齋齋著

俳諧新式

四季の題にほと加へ切字でにこの秘傳
全三冊 付合よりきよむおもむき集りたる
巻水

俳諧一枚起請

此書は俳門人許六の他、俳諧の心ゆふもき
ふと一枚起請ふらうてあるものなり 全一冊

蕉門一夜口授

蕉門俳諧の要化流の秘と門人の
問ひ答ふる事 全一冊 加賀麦水

季寄手勝手

懐中一冊 季寄手勝手
此書は季寄手勝手とせに習りて、その

美夏へ夏くきと三條の上で、きよきと持つて、その
便利なるきと、はふ手紙百韻の法去り、短切きと、その約し、付る

